長崎純心大学

学生相談室だより

第 22 号
2011．１０．１発行

学生相談室のご案内
開室曜日：月曜日～金曜日
開室時間：12:00～16:00
場　　所：保健センター内

秋風が肌に気持ちいい季節になりました。学生相談室は新しい場所でカウンセリングをスタートして１年が経ちました。スポーツ、読書、芸術・・・長崎くんち、純心祭・・・楽しみが多い季節ですね。カウンセラーからのメッセージで新しい何かを感じることができるといいですね。

～　カウンセラーからひとこと　～

最後だとわかっていたなら

浅香　佐輝子（木曜日担当）

たしかにいつも明日はやってくる　　でももしそれがわたしの勘違いで　　今日で全てが終わるのだとしたら
わたしは　今日　　どんなにあなたを愛しているか　伝えたい

そして　わたしたちは　忘れないようにしたい　　若い人にも　年老いた人にも　　明日は誰にも約束されていないのだということを
愛する人を抱きしめられるのは　　今日が最後になるかもしれないことを

だから　今日　　あなたの大切な人たちを　　しっかりと抱きしめよう　　そして　その人を愛していることを
いつでも　　いつまでも大切な存在だということを　　そっと伝えよう

「ごめんね」や「ゆるしてね」や　　「ありがとう」や「気にしないでね」を　　伝える時を持とう
そうすれば　もし明日が来ないとしても　　あなたは今日を後悔しないだろうから

作：ノーマ・コーネット・マレック
訳：佐川　睦　　（サンクチュアリ出版）

これは「最後だとわかっていたら」という詩の抜粋です。20 年余り前、作者が家族をある事故で亡くした悲しみから生まれた詩です。その後、この詩は９・11 同時多発テロ後にネットで広がり、さらに今年、３・11 震災後に再び広がりをみせています。今、出会っている人達との時間は、ずっとあるわけでもなく、明日が確実なものかもわかりません。限られた生の中で時間を生きたものにしていくためには、今、この瞬間を大切にしていくこと。これが最後かもしれないと思うと、もっと素直に想いを伝えられそうな気がします。

映画「ゲート」（原爆の火）を観て

川浪　由喜子（火・水・金曜日担当）

皆さんは、「原爆の火」が福岡県星野村でずっと燃え続けていることをご存知でしたか？　私は、被爆県の住民として恥ずかしいことですが、その事を知りませんでした。「原爆の火」は 1945 年９月 16 日、星の村出身の山本達雄さんが広島に住む叔父の消息を尋ねて現地に赴いた折、地下壕で見つけて星野村の自宅に持ち帰り、仏壇に灯して 23 年間、消さないよう密やかに守り続けたものでした。ある新聞記者にその事を話したことがきっかけとなり、その火は平和を願う供養の火、世界の平和の道しるべの火として永遠に灯し続けるため、星野村の平和の塔に無事移されたのです。「ゲート」という映画は、この「原爆の火」を世界最初の核実験が行われたニューメキシコ州のトリニティサイトに戻すために、灼熱の中 2500km の祈りの行脚を続けた僧侶達のドキュメンタリー映画です。

この旅は「始まりの所に戻すことにより因果が終わる」という仏教の教えに基づいて、「核実験が最初に行われた日（７月の何日だったか、日にちは忘れてしまいました。）に行脚を始めて、長崎に原爆が投下された８月９日にトリニティサイトの地に“原爆の火”を戻す」という計画でした。しかし、60 年間、トリニティサイトのゲートは一度も開かれたことはなく、たとえそこに到着してもゲートが開けられるという保証は全くない中で始められた行脚だったのです。一行の中には、ドクターストップを振り切って参加した末期がんの僧侶や、原爆を投下されたことでアメリカを憎み、許せないという思いを抱えたまま参加した僧侶もいました。そういう中で、アメリカインディアン、宗教や宗派を超えた平和を祈る様々な人々とともに、様々なドラマを生み出しながら、灼熱の中での旅が続き、ついに 2005 年８月９日、トリニティサイトのゲートに到着します。そして、ついに 60 年間開けられなかったゲートが開けられ“原爆の火”は 60 年前に生まれた場所に戻って、消されたのです。この時は感動で、本当に涙が止まりませんでした。

なぜ「開かずの門」だったトリニティサイトのゲートが開いたのか？それは「みんなが平和を祈り、願っているから…」だと思います。「一人ひとりの思いは小さくても、それが一つになった時、不可能と思われることも可能になる」ということはよく聞くことですが、それを実感した映画でした。今、原発について様々な意見が議論されています。この映画の監督、マットテイラー氏はこう語っています。「原発は簡単には止められない。なぜなら、いろいろな経済的なことがあるから。だから何年もかかるかもしれないが、原発がなくても大丈夫なものをこの映画の収益で研究してもらうんだ。そしてこの映画は日本から世界に発信する必要があるんだ」と…この映画は、各地で自主上映会という形で上映されているようですが、長崎では２度目だったようです。皆さんも、機会があったら是非、この映画を見ていただきたいなと思います。

うたのちから

瀬頭　りつ子（月曜日担当）

みなさんは「アンパンマンのマーチ」という歌を知っていますか？　ご存知の人も多いでしょうが、「アンパンマンのマーチ」とはアニメ「アンパンマン」のテーマソングで、「♪そうだ　うれしいんだ　生きる　よろこび　たとえ胸の傷がいたんでも…（後略）♪」という歌い出しから始まる、あの歌です。

この「アンパンマンのマーチ」が、今年の３月 11 日に起こった東日本大震災以降、ラジオやインターネットなどで、よく聴かれるようになったそうです。もちろん震災以前より、この歌に勇気づけられた人はたくさんいるようですが、「アンパンマン」が困っている人を次々と助けていく様子が、震災に遭い、救援を求める人たちの希望の光のようなものと重なり合い、この歌がよく聴かれるようになったのかもしれません。

「アンパンマンのマーチ」の歌詞の中には、人を勇気づけるフレーズがたくさんありますが、私がその歌詞の中で何となく気になるフレーズとして、「たとえ胸の傷がいたんでも」というフレーズがあります。「アンパンマンはヒーローだけど、胸が傷つくこともあるんだ！」と思ったからです。アンパンマンは、バイキンマンと戦う中でやられてしまい、心が折れるような経験をすることもあります。そういった様子が「胸の傷がいたんでも」というフレーズに表れているようです。でもそんな時、物語の中でアンパンマンは、ジャムおじさんに弱音を吐いたり、頭のパンを作り直してもらったりしながら、再び飛び立っていきます。

そんなことを考えた時、私は「これって、人間っぽいなぁ」と思いました。人間も、時々「胸の傷が痛む」ようなことを経験し、身近にいる信頼できる人に相談したり手助けしてもらったりしながら、一歩ずつ生活していきます。そう考えると、私たち人間の一人ひとりが「アンパンマン」のようなヒーローなのかも！？（女子の場合はヒロインかな？）

今回、この原稿を書きながら、あらためて歌には人の力となる何かが存在するのだな、と思いました。自分自身の応援歌のようなものを見つけるのも、日々の生活を送る上で役に立つかもしれない、と思う今日この頃です。